

「アビスパ福岡ファン・サポーターシンポジウム」議事録

[アビスパ福岡ファン・サポーターシンポジウム]

日時:2007年12月9日(日)10時~11時半

会場:エルガーラ7階中ホール

出席者:アビスパ福岡(株)代表取締役都筑興氏、GM兼チーム統括グループ長田部和良氏

常務取締役福本研一氏、社長付渉外担当山田浩一氏、事業部長兼営業推進グループ長内田雄二氏、

まちづくり推進部長伊勢川幸満氏

スポーツライター中倉一志氏、

進行:信川竜太氏

ファン・サポーター約300名

内容:第一部 「2007年シーズンの振り返りと2008年シーズンに向けて」パネルディスカッション

第二部 質疑応答

信川氏(以下、敬称略) 皆さん、本日は朝早くからお集まり頂きましてまことにありがとうございます。

これよりアビスパ福岡ファン・サポーターシンポジウム始めて参りたいと思います。壇上にはアビスパ福岡都筑興社長、田部和良GM兼チーム統括部長、そしてスポーツライターの中倉さんにおいて頂いております。えー「J1復帰を掲げたにも関わらず、今シーズンは22勝19敗7引き分け7位という非常に残念な結果に終わりました。この今シーズンを反省しまして皆さんが誇れるクラブに成長していけるように建設的な意見交流の場になればという風に考えております。また今シーズン、サポーターの皆さんが疑問に思われたいくつかのクラブが下した決定あるいはクラブが抱えている問題などについても社長並びにチームスタッフの方からも説明をして頂きたいと思っております。

では、都筑社長に今シーズンを振り返り何故チームはこういう成績になってしまったのか、今シーズンの総括をお願いしたいと思います。

都筑 おはようございます。たくさんの方がお集まりいただきましてありがとうございます。

えー今日は、いつもはスタジアムの会議室でやるということちょっと殺風景な感じがしますので、今日は奮発してこの会場を借りたということでもあります。よろしく願います。

今、司会からご説明がありましたけれども、今シーズンの総括ということでまずお話しします。

まずシーズンを始めるに当たりましてまず私が考えましたことは色んなことを中長期視点で考えようと、あるいは物事を決めるのに中長期な視点で決めようということ、これを皆様の前でお話ししたことがあると思います。

そういうことを基本にクラブの運営をするということに来て参りました。でまずチームのことでありますけれども、なかなか成績が低迷が続いているという中で、なんとしても去年「J1から」J2に落ちたということで是非また復活をしたいということがございまして、監督にリトバルスキー氏を、そしてチームの統括部長に小林伸二氏をこの二人を招聘をしてその間色々チームの話あるいは今後私どもが求める姿を両者の方にお話しをして来て頂いたということでございます。まずそういう体制を作りました。

チームの3本柱の一つはそういうことであります。それから育成部門の充実ということで、これも大きな柱の一つと考えまして育成部門の統括というポストを作りまして、そこからシステムティックに機能するようにといういことでチームの統制を図ったということでございますが、

まずユースのチームがクラブから離れたところで練習しているということもございまして、ユースの練習をクラブハウスの前の広い人工芝の球技場でやるようにしました。それからサッカースクールを中心としたホームタウン活動とそれと地域に密着した地域活動、この二つを合わせた、いわゆる勝負の世界と違う着実なあるいは地域に根ざしたチーム作りということを念頭においたそういう地域活動を積極的に推進するという3つの柱を立てて今年のクラブ運営を行ってきたということでもあります。

チームの成績については皆様のご承知の通りであります。結果的には司会からございました通りに大変不本意な成績終わったということではありますが、その過程におきましてチームの中で、チーム体制の中で不協和音が聞こえてきたということがございました。皆様には大変ご心配をかけたと思います。

もちろん私どももそれを傍観していたわけではなくて、かなり前からその辺の修復というかそれに当たってきたつもりであります。

忌憚のない話しをすると、監督とチーム統括部長のチームワークが取れないということは非常に大きな問題でございますので、かなり前からずいぶん話し合いをしました。監督とももちろん何度も何度も話しましたしチームの統括部長にも話し合いを続けまして、最終的には強化部長というのは、最大の責務のひとつは監督のサポートをすると、監督が働きやすいあるいはチームを統括しやすいそういう場面をサポートすることが役目であるということも何度も訴えてお話ししました。

先ほど中長期的な点で運営を行うということをお願いしましたが、特にその意味は冒頭シーズン前は具体的な名前は挙げませんでしたけど、その意図することは実は「統括部長は是非クラブの中核的な存在になって欲しい」と、2年3年5年あるいは10年先と、そういうアビスパを考えた場合に、よくアビスパを知ってる方あるいは九州の方ということで、小林さんに訴えて、これも訴えるのにかなり時間がかかりましたけども、そういうお話しのもとで契約をしたということでございます。最初スタートは走って頂いた訳ですけども、途中から先ほど申しましたように不協和音が出てきたということで非常に残念だなという風に思いました。今申しましたように説得を重ねたかけですけども、なかなかうまくいかない、結局どうすることになるかと申しますと、クラブの運営で一番問題なのはクラブ全体が気持ちが一緒になるということ、ましてやチームの中が気持ちが一緒にならないということはこれ大変なことです。

でいよいよ来期のシーズン編成の問題が出てきます。ですがそこが機能しなくなっているという現実が出てきたわけです。そういう現実を目の前にして非常に苦渋の決断という、まさしくそういうことでございますが、小林さんに解任というお話しをさせていただきました。

そういうことがございましたけども一日でも早く体制作りをしたいということから、リトバルスキー監督には「是非続投をお願いしたい」というお話をいたしました。ご本人ももちろん「する」ということでおっしゃいましたけども、どうして監督に続投かというひと言でいえばクラブあるいはチームの一貫性を取ることとあります。チームを1年間直接指揮をとられた監督が反省点、課題を一番認識されていると思います。もちろん私も話を随分していますので、そういう観点からですね監督が「来期もやるよ」ということを仰った。まさしくですね、継続性というのはこういうことかなと、監督がどういうことを修正してどういうチームにしたいとあるいは戦い方をどういう風に変えたいという風なことをおっしゃった。そこに私も納得をして、でリトバルスキー氏に「監督をお願いしたい」という風に申し上げました。

で、現在は来期に向かってチーム編成の真っ最中ということでございます。

一応チームはそういうことでございますが、次に地域活動の件でございますけども、やはり福岡市ですと、市だけでなく他市県の皆様に色々私たちスタッフが出掛けて行ってやったり徹底をしているということでございますけども、やはりこれはですね、大都市においてこれだけの地域活動をするというのはなかなか大変なことということでございます。スタッフは限られた中で活動いたしましたけども、まだまだ十分ではないという風に思っております。ただ、今後はですね、もっとスタッフを充実して福岡市内あるいは都市圏、それからもっと福岡県レベルにですね、足を伸ばしていきたい手を広げていきたいと思っております。

それから育成部門については先ほど申しあげました通り形そのものは出来て参りました。でユースの子供たちも今年は二人トップを上がったということで、来年もですね、有望な選手もいるということでございますので着々と成果が上がっていくのかというように期待をしています。ただやはり育成というのは2年3年の話ではございませんので、5年10年というレンジで考えるということになります。まさしく中長期視点で取り組むようになるかと思っております。でそういう反省と、来期に向かってという話がありますが、来期に向かってはですね、リトバルスキー氏の監督続行ということと、チームの統括部長ということで適任の方はということで探したわけではございますけれども、ここにおられる田部さんが最適任という風に判断いたしました。

田部さんは後でお話していただきますけれども、チームのことはもちろんですけどもこういうプロサッカーチームの運営、事業展開に長けた方でありまして、その道のプロフェッショナルであります。いつも皆さんから素人社長といつも言われているんですけども、玄人、いわゆるプロフェッショナルの方が来られたのかなということで、私は期待しております。

あと今後の育成あるいは地域活動でございますけれども、育成もですね、今度は少しスタッフが変わりましたけれども今まで以上に内容を充実していきたいと思っておりますので、ご期待をして頂きたいという風に思っております。

信川（社長に）じゃ、一度お座り下さい。先ほど体制内で不協和音という話がございましたけれども、我々もそれはメッセージレポートなどで知っております。差し支えなければ、監督と強化部長が方向性がどのように違

っていたのかというのを伺っても宜しいでしょうか？

都筑 これは非常に微妙なことをごさいます、ハッキリいって戦術の違いだろう、サッカー観の違いだろうと思います。これはどちらが正しいとかどちらが駄目だとかいうつもりはございません。先ほど申し上げましたように、強化部長というのは監督をサポートするというので契約をしたわけですので、そういう意味では姿勢を正して欲しいということをお願いしました。

信川 シーズン中、再三にわたって補強をして欲しいという監督の要望がありましたけれども、それに強化部長として応えられなかったという部分もあるのかと思われませんが、そこら辺はどうでしょうか？

都筑 小林さんは大変チームのことを考えていただいたと思います。チームの経済・経営基盤が弱いということもございまして、そういうことからそういう選手の補強が十分に取れなかったという風にも取れます。

信川 それはそれで立場上のことはわかってらっしゃった、にも拘らず不協和音があったことに対して、その中を取り持つことができなかったというのはチームにとっては大きな損失だったような気がしますけれども、

都筑 おっしゃる通りです。おっしゃる通りですが、なかなかこれは随分協議をして、極端に申しますと毎日毎日お話しをしたということでございまして、なかなか自分の意見を変えられない、というところがあって現在に至ったということでございます。

信川 中倉さんはそこらあたりはどのように感じてらっしゃいますか？

中倉 そうですね、社長もおっしゃいましたけれども、サッカー観というものは色々あると思うので、リトバルスキー監督と小林前強化部長との意見が違ったこと自体に関しては特に問題はなかったのかなと思います。一番大切なのは、その意見をどうして統一できなかったのかなと思いますね。我々も含めてメディアは全部のことを報道しているわけではありませぬので、皆さん誤解されてる部分もあると思いますけれども、リトバルスキー監督は就任した当日から補強の必要性を訴えておられまして、そのポジションについても年間を通してブレることはなかったですね。それを話し合うということをおっしゃってございましたけれども、小林強化部長の方は就任した当初から今シーズンは補強は一切しないんだと、これが強化部長の方針だということをお話しされておりました。これがボクらが取材したり話したりしてる中で感じたことは、その話を彼はしていないことですね。監督が「訴える、話は先延ばされた」監督から言えばそういうことになるし、強化部長からすれば「お金もないのに言ってきた」ということだと思うんですけども、それをシーズン始めにケリをつけないといけなかったということですね。実際にするのか、できないのか、やらないのか、それはお互いの中でそれぞれの意見を持ちつつも突き詰めた話をしないままにシーズンが過ぎ、成績が低迷し、そのズレは最後まで、というか戦い続ける中でどんどんズレてきたっちゃのかなと、そんな風に感じます。

信川 第1クール経ったところで、チームは首位に立ちました。しかしその後ちょっと低迷しまして、そこから再浮上することはできなかったんですけども、その理由、原因については社長、どのように感じてらっしゃいますか？

都筑 今、色々反省すると、やはり色々な問題がございました。いちいちここで申し上げにくいので具体的にはお話しませんが、やはり1つ、2つ、3つとそういう原因がございましたけれども、それを修正できなかったというのはですね、やはりこれは監督、強化部長の責任はありますけれども、コーチのチームワークも取れていなかったと、そういうところがですね、やはり修正を早くすれば良かったんですけども、修正が一つ一つズレていって結果がこういう風になったのかなという風に思います。

(コレ何を言いたいのか？言ってることを本人もわかってないのではないかな = 編集者)

信川 いつも試合見ている中倉さん、第三者の目から見て第1クール首位で終えた、これはもちろん選手の頑張りもあった、戦術的なこともあったと思うんですけども、その後低迷して再浮上できなかった、これはどこに問題があるという風に思われますか？

中倉 ひと言でいえば「一つになれなかった」ということだと思いますけれども、現場で見る限りでは、選手たちの意識の差が非常に顕著だった、ということですね。ピッチに出てる11人にして11人がそれぞれ意識が違う、口で表現する分については皆さんちょっとしたことをやられている、少しのところは修正できないと11人が11人言うんですけども、細かく聞いていくとそこに非常にブレがある。たとえば監督がやろうとしていることに不安があると思っている選手もいる。プロなんだから言われたことをとことん突き詰めるのがプロなんだと思っている選手もいる。あるいは、不満を抱えている選手、サテライトになると俺らがうまい

のに何故出さないんだと公言する選手がいる。で結局こういう状態の中では調子がいいときはいいんですけども、負け始めたときに同じ方向は向いているんですけども視点が少しずつ少しずつ11人がズレてくる。ですから第2クールから、見事に同じような連敗、同じような負け方を4回したと思うんですけども、結局自分たちの機軸の中でも自分たちのリズムの時は自然と意思が一致しますからいいんですけども、相手に何か倒されたときにみんなが違うことやってバラバラになって、そのバラバラになったことに対する問題点もみんなが違うことを見ていたと、それが最後まで修正できなかったなと思います。

信川 そういった監督の選手に対する意見と、チームの中での色々な選手たちの意見、それが合わない時に、社長かどうかわからないんですが、強化部長の方が中を修正するというかまとめるということになってくるんじゃないかと思うんですけども、今シーズンも何度かそういう「強化部長には話しました。その話が監督に行ってるかどうかわかりません。」ということも、選手から聞いたことがあるんですけど、田部さんは今後、そのような点についてはどういう風に考えていこうと思われていますか？

田部 僕日本人ですので、選手もほとんど日本人だということで、監督は外国人、外国人の監督が考えるイメージを具体的に選手に伝えていくのがコーチの仕事であり、もしくは立場を変えた僕らの仕事であるという風に思うんですね。で、現場でコーチ陣が丸となってやっていくというのが非常に大切なことですし、違う立場でモノを言うという人間が必要だと思いますから、選手に話をしていきたいと思っています。同時に監督に対しても、先ほど意見の食い違いがあったと言われましたけれども、当然意見は食い違う、選手11人、監督、コーチ陣絶対全員意見は違うので、それをディスカッションしてひとつにしてまとめて選手に伝えるという、そういう作業が大切だと思います。そこがもしかしたら欠けていたんじゃないかと、そこが修正したいと思っています。

信川 それから中長期的ビジョンという話が出ましたけれども、その中長期ビジョンと、今回大量の選手が解雇されましたが、その中には非常に若い選手もいらっしゃいました。ちょっと食い違いがあるんじゃないかなと感じるんですが、そこは社長どうでしょう？

都筑 全然、食い違っていると感じられませんが、その辺は私が説明するよりは田部さんが説明する方がもっとわかりがいいかなと思います。(と、丸投げ)

田部 残念ながら15人の選手がチームを離れ、まっ一人、アレックスも「他のチームへ行きたい」ということで離れましたけれども、来シーズンのプランニングをするということが前提にあると思います。監督を代えるのか、戦術を変えるのか、今シーズンはもちろん成績が悪かったので何かしら変えないといけない、大きく変える方法としては反省点を見出してそれを直していった程度継続性を持ちながらやっていく方法が一つ、それから監督を代える方法が一つということで、ま、監督を代えないで問題点を洗い出して改善していこうという決断をクラブはしました。そこが前提にあります。その後、来シーズンは今シーズンと同じことをやっては勝てないというのは当然反省点にありまして、じゃあ来シーズンはこういうサッカーをやっていこうと、今シーズンの第一クール、非常に見ていて楽しいサッカーしていたと思うんですけども、いかにせんそれだけでは継続しないし勝てないというJ2の現実というのがやはりあります。それは他のチームも経験しているJ1のゲームのようにオープンサッカーといいいますか、お互いが攻め合うサッカーというのはJ2ではなかなかできないと、それを打ち破ろうとして今シーズンやってきたんですけど、いかにせんそれだけではJ2ではなかなか勝てないと、来シーズンの第一の目標はやはり勝っていくということですので、今シーズンと同じ戦術やっていたんでは勝てないと、だからやり方も変えなくてはいけないというのがまず前提にある。で、そうしていくと、GKポジションが一つに3なし4人、他に10個のポジションがありますので、同じぐらいの競い合うレベルの選手を二人ずつ持ちたい、それで合計20人。プラス当然怪我人がシーズン通して出ますんで、プラス同等な選手をプラス3人くらい持ちたい。そうするとそれだけで25人、6人、7人くらいで終わる。そうすると今いた31人の選手のうちの、来期考える戦術の中で右SBのポジションの選手はこういうことはできて欲しいというイメージの中で、今いる31人の選手の中でこのポジションにはこの選手とこの選手はできる、じゃあ右サイドのハーフにはこの選手はできる、センターハーフのポジションにはこの選手はできるという風に当てはめていった結果、何人かの選手がここでリストアップされていって、で足りないポジションには他のチームから補強するなりそういう方法をとらざるえないという決定をした訳ですね。

ですので、31人マイナス何人というカウントをしたわけじゃなく、来シーズンの戦術があって来シーズンの11個のポジションがあって、そこに当てはまるのはこの選手、この選手、この選手とプラスの感じになっていったのが15人の選手ということになった。それが中長期といいいますか来シーズンでいえば非常に短期、短期

を勝つためにはどうするか、ということになっています。

社長が申し上げた中長期というのはやはりその先のことなんで、ユースからどうやって選手を引っ張り上げるか、ユースとトップをもっと近づける、ユースとジュニアユースをもっと近づけるというのがあると、そういった方法を今後とっていきたいと思っていますけれど、まず一番大事なのは来シーズン、そういったことを皆さんにご理解いただきたいと思います。

(この人には地元志向やユースの子を長い目で大切に育てるという考えは欠落、いともあっさり)

信川 中倉さんにもお伺いしたいんですけども、理想と現実という部分がありました。今シーズン、ポゼッションサッカーという理想がありましたけれども、その理想だけでは勝てない。シーズン終盤になるとそのカタチも全く見えなくなった。こういうチームにとっても軸がブレるというのは、選手たちにとってもサポーターにとっても、かなり不安な部分があると思うのですけれども、中倉さんから見てどうでしょう？

中倉 そうですね。正直、今年が一番試合を見ていてわからなかったというのが正直な気持ちです。言葉が適切かどうかわかりませんが非常に違和感を感じたというのがあります。正直ボクもわからなかったんですね。いくら選手が調子悪くても、戦術が問題あるうが、何があるうがある程度のことはできると思うんですね。ところが、今シーズンはある程度のこと、我々が練習を見てあるいは選手の話や監督の話や聞いて、想定している最悪のところまで行かないという試合がいくつもあったということですね。だから非常にわからなかった。先ほどなか何度も出ていますけれども、最大の原因は一つになっていないことだと思っています。それを強く感じたのはですね、クラブの方には失礼ですけども、こういうクラブですから資金的な面だとか、諸経緯とかありましてね、万全な状態でまだ運営できるクラブではないと、僕は判断している。ですから色々な問題は常にあるし、色々な課題はあるんですけども、今シーズンに限っては職員の不満とか選手の不満とかが我々のところに直接響いてくるし直接聞こえてくるようになった。過去も裏では確かにありましたけれども、いわゆるクラブの職員も選手もコーチ陣も当の当事者たちが部外者にまで、自分のクラブがこんなことが悪いんだ、あんなことが悪いんだと、あいつはここが悪いんだと、こういう話しがシーズン途中からよく耳に入るようになりまして、本当にこれではチームがどうか、監督がどうか、選手がどうかという以前の問題かな、というのが非常に強くありました。

信川 ま、理想というものが変わることはあると思うんですけども、理想が変わっても理念は変わってはいけないんじゃないか、という風に思うんですが、そういう意味で、確か前回J2に落ちたときには地域密着型のチームを作ると、地元高校などから選手を入れて九州に名のあるチームを作りたいという方向性だったと思うんですけど、そこら辺は今後どうなっていくんでしょうか？

都筑 今シーズン当初からその話をして参りました。ですが現実問題としてはそれが全く続かなかったということで、私自身も非常に残念に思っておったんですけども、今度、GMに田部さんが来られて、もう何日かのうちに、1週間も経たないうちにそういうシステムと申しますか、そういう体制、あるいはコミュニケーションが作れてきているという風に思います。どこまでしゃべれるかわかりませんが、しゃべれる範囲でしゃべってください。

(と、ここでも田部氏へ振りはじめ)

田部 九州の中でも福岡には良い選手がたくさんいるんですね。僕は関東の人間ですけども、関東の人間から見れば九州の人間はフィジカル的に強いとか精神的にも強いとか、そういったことが高校サッカーでも証明していますし、そういった資質を持った選手がいると、そういう風に思います。

うちにももちろん東福岡出身の選手もいるし国見出身の選手も何人かいるし、強いハートを持った選手が何人かいます。今後はもちろん福岡を中心とした地元、という言い方をしていると思うんですけども、当然選手をとっていきたい。選手を取るというのは、外部から取るというだけでなく内部から育成をするということも含めてなんですけれども、高校だけでなく、福岡大とか九州産業大とか福岡教育大とかそういった全国的にレベルの高い大学、選手を輩出している大学からもあります。そういったところからも選手をとっていくべきだと。現実を申し上げますと、アントラーズのセンターFW田代は福岡大の選手でしたけれども、鳥栖の強化指定選手で福岡大にいながら鳥栖に練習に行きアントラーズに入るといったのが現実でした。福岡の高校であれ福岡の大学であれ、そういった選手をやはりまずはアビスパがとるといったことは絶対に認識しないといけないことではあると思います。ですので、福岡大学、共立大学、九州産大、教育大などの選手、そういった大学の選手というのは、年代的にプロのレベル、J1、J2の試合で使えるレベルのフィジカルに非常に近いと思っています。当然うちのU-18、地元の高校、東福岡であるとか、筑陽であるとか東海大五高とか、東

海五の選手は一人、今年サンフレッチェに入りますけれども、うちには来ないということもありますので、そういったこともできれば、当然地元の選手は地元のチームへとといったことを訴えていきたいと思っています。

信川 地域密着という理念のもと、これからチーム作りをしていくという、これまでもやってきたとは思いますが、していくわけなんです。と同時にこれまでアビスパ福岡というチームにはたくさんの選手が所属しまして、またたくさんの強いキャラクター、あるいは良い選手がチームを離れていった。でアビスパというチームはそういうOBたちをあまり大事にしないなという風感じてらっしゃるサポーターの方はたくさんいらっしゃるんですけども、その点についてチームとOB、この点について田部さんはどのように感じてらっしゃいますか？（と、もはや社長には聞かなくなってきた）

田部 僕は外部から来た人間でまだ福岡のことはよく知らないんで、まだ博多の駅前のホテルにまだ住んでますけれども、だからこそあえて思うんですが、クラブというのは歴史、このクラブも12年の歴史をもっていると、やはり歴史持っていかなければならない。歴史と作るのは人間なんで、やはりOBを大事にするといいますが、OBが根付くような、そういったクラブにしないといけないと、逆に思います。一般の方はね、福岡っていいところだなんて、転勤等で福岡に来るとやはりここに住みたいなんて、思ってる方が全国にたくさんいるわけで、サッカー選手でもやはり生活するには良い街だという所もありますし、それと同じようなレベルに、良い街の良いクラブだといわれるようにクラブも選手にしないといけないと思いますし、クラブもそういう意識でOBが根付くようなチームにそこは変えていくべきだと、いう風に本当に強く思います。

信川 そういう方針といったものは今後何か具体的な案とかいったものはありますか？

社長 まだ申し上げにくいんですけども、(誰に対して、何のことを言にくいのか？何も考えを持ってないだけじゃないのか？ = 編集者)そういう話を田部さん経由で各関係者とお話をしているということでございまして、その話し合いも何ら問題なくスムーズに行くものと思っております。

信川 湘南などはOB戦を試合の前にやっていますよね。

中倉 そうでしょうかね。話は大きくなってきちゃうかも知れませんが、我々が仕事してても思いますし、サポーターの皆さんも思ってらっしゃると思いますけれども、うまくいえませんが、アビスパと関係ある人たちとうまく関係が保てないのかなと思います。ちょっとキツイ言い方をすると、リスペクトが足りないのかなと思います。よくサポーターの方が行動されるときに、色んなことされているんですけども、こういうクラブですから、お金もないですし、サポーターの方に協力お願いするとか、あるいはメディアに協力してもらったりとか、あるいは引退した選手に協力してもらったりとか、絶対に必要なことだと。現に今そういうことをしてらっしゃる方はたくさんいらっしゃる。特に今年のメディアは、以前J2にいた頃はほとんどのメディアは取材に来なかったんですね。私以外には週に1回西日本新聞が来ればいいというレベルだったのが、今年はほとんどのメディアが毎日のように来る。だけれどもそういうものに対してのありがたみとか、自分たちのクラブに助かってるんだという意識がちょっと低いのかなという感じがします。今年のようにあれだけ調子悪くなって試合に行ったら何も面白くない試合が続いても、雁ノ巣には平日に大勢の方が見に来られる。あれを本当にありがたいと思ったら、選手たちももちろんそうだけれど、フロントもそうかもしれませんし、クラブの職員の方もそうだと思うし、そういったところの心構えが結果的に出て行った選手を大事にできない、あるいは出て行った選手がそれを感じていて戻ってこないことにつながっているのかなと思います。

その辺の考え方、協力してもらいたいというのは何の問題もない、みんな協力したいと思っている。それに対して見返りを求めているわけでは全然ないんですけども、何か違うんじゃないのというのはあるかなという感じはします。

信川 それからチームとしての継続性ということについても今日はお伺いしたいんですけども、社長としての任期というのもあると思うんですが、社長の任期と、また社長が代わるとそのチームが違うビジョンになってしまうというのではなく、継続性を求めていかないといけないと思うんですが、そのあたりは社長はどのように考えてらっしゃいますか？

都筑 まさしく司会から指摘がございましたが、継続性というのが全くなかったなと、私個人の経験からいえると思います。ですからその辺を皆さんが敏感に感じておられて危機感を持っておられるという風に思いま

す。私は事実、自分自身をそういう風を感じておるわけですから、今後そういうことがないようにしたい、ということで「中長期」という言葉を使っております。具体的にはですね、色んな、中倉さんからご指摘がございましたけれど、色んなうちの内部の関係者そのものがそういう意識を持っていかなくちゃいけないと。社長が任期というものがございましたけれど、別に私は任期というものがあるわけではございませんので、九電人事でも全くあるわけではございません。どなかがあと来られるかまったくわかりませんが、別に早く辞めたいとか思っているわけではございませんし、長くやりたいと思ってるわけではございません。今とにかく与えられた仕事をですね、今やらないといけなと。私自身は固い決意でもっています。

田部 継続性という言葉があったと、それについて話したいと思いますが、細かい戦術やシステムは監督が変われば変わるんで、そういったことはクラブとして統一したものを持つ必要はないと思うんですが、やはり折角九州のチームなんで、ガツガツいくというかアグレッシブだとか、戦うとかね。そういうサッカーするチームでありクラブであるというのが福岡のチームとしてあってもいいんじゃないかと思えます。もちろんそのなかで戦術のアレンジは監督によって変わるんだろうけども、やはり選手とも話していたんですが、18歳くらいの年代だと九州の高校のサッカーというのは非常にフィジカル的に強く、戦うんだという前に前に行くんだというチームが非常に多いと、そういうところを関東のチームは怖がっていると。例えば「リーグになるとサッカーに差がなくなってきて、そういった点は非常に悲しいのかなと。やはり九州のチームで九州の選手はできれば多くしたい、そういう資質、精神的な資質もそうだしフィジカル的な資質もそうですが、選手が集まってくるのであればやはり戦うといった意識が全面に出るようなチームであって欲しいなと思うし、皆さんもだと思っただけでそういった熱いサッカーをする方がチームにとって必要かなと思っています。だから洗練されたサッカーをするチームもあれば激しいチームもあっていいわけで、アビスパは洗練されていく必要はないと、激しい戦いをするチームであるべきだと思っています。それが継続性だと考えます。

信川 中倉さん今の意見に対してどうでしょう？

中倉 そうですね、僕もそういうサッカーを見たいと思うし、福岡の方はそういうサッカーが好きなんじゃないかなと思います。思い起こせば2000年のピッコリ監督がやった、世間中はですね、日本国中がアビスパは汚いといったときに、私も含めて皆さんはアビスパは汚いんじゃないかと。文句言うなら見に来いというのがあったと思うんですね。実際、シーズン終了間際には世間のメディアは福岡に注目して、ある雑誌では博多の森の光景が2ページにわたって載ったとか、そういう時代がありましたけど、やっぱりそういうチームになって欲しいし、博多の森は熱いんだと、それが日本中に知れ渡るようなチームになって欲しいですね。

信川 そういう周りからの声とか風をちゃんと受け止めて、選手、監督、チームを守ってくれる体制が必要なんだということにもつながりますよね。

中倉 そうですね。私も福岡生まれなんですけれども、福岡に住んでるよりも東京、北海道に住んでいたのが長いんでどちらかというと引いた目で福岡を見れるんですけれども、この土地というのは可能性が非常に多いし、本当に町の人が温かいし福岡の人たちは勝たないと来ないんだというけど、よく見ると全然そうじゃないんですよね。結果はともかくがんばってる人がいれば「よか、よか」といって応援する土地なんで是非それを生かして、みんなもそれをチームに向けたかと思っただけで、それを生かしたチーム作りにもしてもらえるとありがたい。

信川 さて来シーズン、待ったなしの「昇格を期待されているんですけれども、選手が半分くらいいなくなりましたよね。新しい選手を補強するという作業をやっていると聞きますけれども、その展望というか、見通しは田部さんどんな感じなんですか？

田部 今、契約更改の交渉の最中なんで、もちろん契約のサインが済んだ選手はそんなに多くはないんですけど、今後当然そういうことをやっていくんで、プラスほかからとると同時にやっています。目的は16人のスターティングメンバー、11人の試合メンバーと同じメンバーで20人くらいのグループを作るとというのが一番の目的でやっています。今いる選手と同じくらいのレベルの選手もしくはそれ以上のレベルの選手をとることを目標に各ポジションで色々話をしています。

信川 今シーズンはポイントゲッターのアレックス選手が26得点、リンコン選手は16得点、二人で42ゴールをあげ

ましたけれども、その穴を埋めるとなると、かなり補強も大変なんじゃないかなと思いますけどどうなんですか？

田部 アレックス選手はいい選手でした。彼はもともとFWじゃない、FWじゃない選手が一番多く点を取るところが問題があったんじゃないのかと思います。僕が昔他のチームからアレックスを見ていたころは左SBでしたから、もちろん彼は色んな能力を持っていたんでああやって得点を取ることができたんですけど、やはりFW取ると、特に日本人のFWというのがアビスパのここ数年の歴史のなかで、余りイメージが世間的にはないというか、やはり日本人のFWがいてプラス外国人のFWがいるというのが、外国人のゴールゲッターがプラスアルファで、外国人は入れ替えやすいとかあとからでも呼ぶことはできるので、やはり核となる日本人のFWをとることが第一の獲得のターゲットかなという風に思いますね。あとリーダーシップをとる選手、ゲームの中でピッチに出ればゲームをコントロールするのは選手なので、その中で悪い流れのときに流れを切ることができるというか、一回ゲームを壊してでもそういった流れをストップすることができるようなリーダーシップを持つ選手というのが欲しいなと。

9月だか10月の京都戦なんて、3 - 0で勝っていて京都に4点取られて負けるというのがありましたけれど、そのときは誰かがゲームを壊してでもゲームを切んなきゃならない。そういったことができる本当に叱咤激励といいますかね、どなって返るといふか、じゃあ日本のサッカーの歴史のなかで一番強いのは数年前のジュビロだと思いますが、あのころは本当にドンガが怒鳴りまくってチームを変えるといふか、ゲームの中でも変えるといふかできていたんじゃないかと思うし、そういった選手がいて欲しいという風に考えています。

信川 来シーズンから胸のスポンサーが下りるといふ話も伝わっていますけれども、そのあと、胸についてくれるところは大丈夫ですか？

都筑 大変苦戦をしています。チームも戦いますけれども、私たちフロントも戦います。

信川 今日はリトバルスキー監督がご出席されておられませんですけども、来シーズンどのようなサッカーをしていくかというお話しは、田部さんされてますかね。

田部 最終的には戦術は選手によって決まるので、選手が決まらないとなんともいえませんが、同時にこういったイメージでサッカーをしたいというイメージのもと選手との交渉に入ってますので、その程度ではいえると思うんですが、やはり簡単にいえば、ま言える範囲ですけども、少しDFラインを下げるといふか後のスペースを突かれないようなサッカーを少しやっていきたいといふのがいえます。

信川 中倉さんは来シーズン、チームに注文とかありますか？

中倉 そうですね。もちろん勝ちたいし負ける試合は見たくないんですけど、戦ってるチームを作って欲しいなと思います。浦和レッズのACLの試合をTVで見たんですけども、そのときにセパハンのチームがシュート外した時にゴールキーパーが偉い怒ってるのをTVで見たんですけども、シュートにしてはそう大して際づくもなかったんですけども、シュートを打たれたことに対して怒ってたというよりも、キチンとその場で問題点をフィールドの中でキチンと整理してそれを伝えて怒鳴って、一回それを整理してまた次のプレーに移ってる。ところが福岡の場合にはゴール取られた後に1年間の間にほとんどなかったと思うんですね。終盤いよいよ駄目になったときに1回か2回久藤が怒鳴り散らしたことがあったんですけども、ほとんどのシーンで点取られると誰も注意しない、慰めるわけでもない。そういうのでなくて、一つひとつが激しく、やってもやられても激しく、今年はサポーターが特に後押ししましたけれども、見てる方がチームに引っ張られるような、そんなチームができるといいなと思います。

(以下質疑応答につづく)